



Domowina (ドモヴィナ＝「祖国」)は、スラヴ語で広く「家」を表す語彙 \*domъ の派生語で、スラヴの少数民族集団ソルブ人の民族組織の名称である。このドモヴィナの代表者会議に、10年近く前に同席したことがある。そこではソルブ語の保全と地位向上、とくにドイツ語教育との“格差是正”が議論されており、当時のブランデンブルク州ドモヴィナの支部長が「われらの存在をかけて」と、活動の重要性を強調していた。

ソルブ人はドイツの片隅に居住するスラヴ人で、現在のソルブ人のほとんど全員がドイツ語とのバイリンガル、というより大部分のソルブ人にとってはドイツ語のほうが優位な言語である。とりわけブランデンブルクでは、ソルブ語は事実上死語に近く、ソルブ人はみな日常的にドイツ語を使って暮らしている。その人たちが「存在をかけて」とまで言う、自分たちの言語への思いは、いったい何なのだろう？「ひとつの言語の消滅がよくないことか？」という、このさい平たく響く言葉との、この隔たりは何なのだろう？

この問いは結局のところ、人が言語を使うとはどういう営みなのか、ある言語を使って生きている“私”は何者なのか、という問いに還元されるのだろう。そしてその答えはたぶん容易には得られない。けれどもこの問題を考えるための事例として、東欧の片隅にいるソルブ人とソルブ語、そして彼らの文学の状況を参照するのは、無益ではないだろう。

**2.** ソルブ人は、ドイツ東部に居住するスラヴ民族である。東欧圏には、移住・移動の結果として少数者－ディアスポラ－となった人々があまた存在するが、ソルブ人の場合は移住者ではない。彼らはむしろ先住民、彼らを取りまくドイツ人が、13世紀以降のドイツ東方移住によってやってきた到来者である。ソルブ語は、系統的にはポーランド語やチェコ語に近い西スラヴ語の一つだが、ソルブ人の住むラウジッツ地方の歴史的経緯－これはもちろんソルブ人社会の主体的な事情ではなく、ここを支配していたドイツ社会ならびにヨーロッパの地政学的事情による－のために、ザクセン州の上ソルブ語とブランデンブルク州の下ソルブ語に分かれて現在に至っている。二つのソルブ語は、概略、上ソルブ語がややチェコ語に近く、下ソルブ語がややポーランド語に近い、と言い表されるような違いをもつ<sup>2</sup>。けれど二つのソルブ語の違いで重要なのは、言語的差異というよりはむしろ、二つのソルブ語世界が置かれてきた状況、その結果としての現状だろう。長い話を究極的に短くすると、ザクセンの上ソルブ語はまだ、多少なりとも生きた言語として存続しているのに対し、ブランデンブルクの下ソルブ語はほぼ絶滅状態、そのように異なる道を歩んできた。そして当然、二つのソルブ・コミュニティの事情も同じではない。

古くよりラウジッツに居住しながら、中世以後はドイツ化の波に押されて同化が進み、19世紀初頭の資料で20万人近くいたとされるソルブ人は、20世紀初頭にはその半分になり、1980年代末の東ドイツでの公称は約6万人となっていた。この「ソルブ人6万」という数は孫引き、ひ孫引きされ、しばしば言語話者の数と混同されて、いまもそこを歩き回っている。しかし言語話者としての集団は、現在これよりはるかに小規模で、十分なソルブ語運用能力をもつ数は、ザクセンとブランデンブルク両方を合わせても2万人ほど、とくにブランデンブルク州で下ソルブ語を母語として話す人の実数は数千人（この“数”に入るのは、四捨五入すれば“ゼロ”になる数だろう）、かつそのほとんどは70歳以上の高齢者である。ブランデンブルク州で日常的にソルブ語を使用している家庭は、わずかに10世帯<sup>3</sup>。家庭で母語として継承される自然言語という意味での下ソルブ語が消滅するのは、時間の問題である。

ソルブ語がここまで衰退した理由は、一言でいえば長いドイツ化の歴史にある。産業構造、政治力、学校や教会など公的領域での格差、ソルブのドイツ化をくい止め、逆行させることのできる要因は何一つなかった。そしてラウジッツに埋まっていた褐炭開発による住空間の喪失があった<sup>4</sup>。現在、褐炭開発はもうソルブ喪失の問題ではなくなった、と言われる。というのも、もうこれ以上喪失しようがないところまで来てしまったからだ。今、褐炭開発をテーマにできるとしたら、それは一般論としての環境問題としてでしかない。

このような状況の中であって、ソルブ語の教育活動はかつてないほどに盛んである。1990年以後のヨーロッパ新時代、もちろんドイツにとっては統一時代、ソルブ社会は組織的に、ソルブ語とドイツ語のバイリンガル教育プロジェクト WITAJ に取り組み、資金不足や教員欠乏に直面しながらも、こんにち広くドイツ語社会にも認知される教育システムを作り上げてきた。上記のように、言語母語話者が数千人、ソルブ語を日常的に使用する家庭が10世帯というブランデンブルク州でも、下ソルブ語を学ぶ生徒の総数は（ブランデンブルク州のソルブ語学習には、さまざまなパターンがあるので、きわめてあらっぽい要約になるが）3千人ほどにのぼる。つまりここにあるのは、街中どころか家に帰っても使うあてのない言語を学校で学ぶ子供たち、という不思議な光景なのだ。そうはいっても継続は力なり、教育の効果は無意味ではない。学校でソルブ語を学んだ若者たち同士が、ドイツ語まじりのソルブ語—というよりはソルブ語まじりのドイツ語—でケールに会話するシーンが生まれつつあるのも事実である。先に下ソルブ語が消滅するのは時間の問題、と述べたけれど、これはあくまでも家庭で母語として継承される言語の話であって、標準化され教育の中で修得される言語という意味では、ソルブ語の消滅は当面ありそうにない。1761年に『下ラウジッツ—ソルブ語文法』を刊行したヨハン・ゴットリーブ・ハウプトマン（1703-1768）は、自分の文法書について、「もうじき滅びる言語の文法を書いてどうするのか、と人は言うかもしれない。（……）それでもソルブ語は、間違いない、私の存命中に滅びることはないだろう」と語った<sup>5</sup>。そのままじつに250年、崖っぷちで生き延びてきたのだ、希望はあるかもしれない。

ではそういう人々の、日常会話を超えた言語活動、つまりは文学はいったいどのようなもので、この絶滅危機言語のあり方とどう結びついてきたのだろうか。

**3.** ソルブ語文学の歴史は、ドイツ宗教改革の時代に始まり、現代に至るまでをおおよそ4つに区分することができる。その第1期は、16世紀から19世紀中頃までの約300年間、第2期は19世紀中期から第二次世界大戦までの約1世紀、第3期は1945年から1990年までの45年間、そして第4期は1990年から現在まで。かなり単純な区切り方ではあるが、第1期は、もっぱら宗教書翻訳の時代、第2期は、ソルブ人によるソルブ語文学の形成期、第3期は、バイリンガル文学の成立期、そして第4期は、それがあらたな社会環境の中で多様化する時代、と特徴づけられる。そしてソルブ人作家たちのソルブ語への態度も、現代に近づくほどに、多様なものになる。

第1期に書かれたのはもっぱら聖書の翻訳などの宗教書で、個人的な創作はほとんどない。ただしこの時期に、上ソルブ、下ソルブの複数の場所で聖書の翻訳が作られ、それが文語形成の出発点となってソルブ世界に二つの標準文語がもたらされた。つまり現代的な意味での文学は不在でも、のちのソルブ文学にとっての長い揺籃期と見ることができる。

ソルブ人が自分たちの言葉で創作を始めたのは第2期の19世紀半ば。スラヴ民族覚醒期、とくにチェコの民族復興運動の影響を受けて、ソルブ語の近代標準語形成が始まり、これと相携えてソ

ルブ人たちの文学活動が興隆した。言語計画、とくに言語コーパス計画の担い手が文学者でもあったというパターンは、東欧地域によく見られるが、このミニチュア版がソルブ社会にも起きたのである。とはいつても、19世紀半ばにチェコなどの影響を受けて創作活動が興ったのはもっぱらザクセンの上ソルブで、ブランデンブルクのソルブ社会に文学が生まれるのは、ほぼ30年遅れてのことになる。

いずれにしても、19世紀ソルブ社会の文学活動は、例外なく、ソルブ人の文化地位向上と、ソルブ語の高度化という動機付けに裏打ちされていた。文学運動の牽引車となったハンドリイ・ゼイラー(1804-1872)、ヤクブ・バルト＝チシンスキ(1856-1919)、出版事業でこれを支えたヤン・A・スモラー(1814-1880)、ソルブ人の詩にメロディーを与え、ソルブ歌曲を生み出した作曲家コルラ・A・コツォル(1822-1904)などは、いずれも「ソルブ語文化」を高め、広めるために活動した人々だった。第一次世界大戦後のワイマール共和国時代—その憲法113条ではじめて、万人における母語使用の権利が唄われたものの、じっさいの対ソルブ政策はそれ以前とさしたる変化もなかった時代—には、民族組織「ドモヴィナ」が結成され、ザクセンでは雑誌や新聞を中心に出版も進んだ。ヤクブ・ロレンツ＝ザレスキ(1874-1939)によって散文形式の作品が発表され、小説というジャンルがソルブ文学に生まれたのもこの時期である<sup>6</sup>。ひた進むドイツ化の中で、ソルブ文学はそれでも、スラヴの一民族の文学として開花したのだった。

けれども、どれほどソルブ文学の担い手たちの名前を並べようと、あるいはチシンスキの詩がいかにかに芸術的に高度なものと主張しようと、ソルブ文学は、少なくともドイツ社会にとっては、存在しないのと同じだった。ソルブの文人たちは、上記のように、いかにソルブ語で完成度の高い作品を作るかに情熱を燃やし、自分たちの創作したソルブ語の作品をドイツ語に訳す、などという取り組みはなかったのだから。それに、かりに翻訳が作られたとしても、この時代にソルブ人の文学など読もうというドイツ人が何人いたことか。つまりはいかに美しい声で歌おうと、歌い手たち以外に聴衆がいない、という状況だったのである。

この状況は第3期、つまり20世紀後半になってようやく変わる。第二次世界大戦の後に生まれたドイツ民主共和国の文化政策によって、ソルブ人はかなりの保護を受け—これを肯定的差別<sup>アフターマテリヤル・アクション</sup>というか、ドモヴィナ懐柔政策<sup>アフターマテリヤル・アクション</sup>というかはさておき—、教育や出版の基盤が確立された。そして、ナチス時代には抵抗組織にも加わったというユリイ・ブレザン(1916-2006)が、ソルブ人として最初にドイツ語で作品を発表し、ドイツ、といってももちろん当時の東ドイツで、最も知られるソルブ作家となった。ドイツ社会主義統一党の文化政策に“迎合”したとも一時は批判されたブレザンの戦略は、いずれにしても結果として、ソルブ文学をドイツ社会に開いたのだった。

次世代に現れたユリイ・コホ(1936-)も、ドイツ語とソルブ語で作品を発表し、バイリンガリズムというソルブ文学の道を確立する。ただコホにとってのドイツ語執筆には、ソルブの問題、とくに褐炭開発による居住地喪失とソルブ文化の崩壊を、文学を通してドイツ社会に訴える、という意図が含まれていた。いっぽうワイマール時代の作家ロレンツ＝ザレスキの孫にあたる詩人キト・ロレンツ(1938-)は、両親がドイツ語しか話さない家庭に生まれ、14歳ではじめてソルブ語を学んだという経歴からか、ドイツ語とソルブ語のバイリンガルという環境をポジティブなものにとらえる立場をとり、ソルブ文学の過去の作品をドイツ語の対訳付きアンソロジー『ソルブ読本』(1981)に編集するなど、ソルブ文学をドイツ語の読者に広く紹介した。こうしてDDR時代の文化政策の枠の中で、ソルブ文学はようやく、ドイツ語の読者を獲得するに至ったのである。

そして1990年—東西ドイツ統一と欧州統合の時代—ソルブ文学は、多様な価値観を内包する第4期に入った。19世紀の文化活動に回帰するかのように、ドイツ語で作品を書くことはソルブ語への裏切り行為としてもっぱらソルブ語で作品を書く若い世代の書き手が現れる一方で、バイリンガリズム・バイカルチャリズムをソルブの文化財産とみなし、従来の“ドイツ対ソルブ”ではなく、“ドイツの中のソルブ、ソルブの中のドイツ”という枠でソルブ文化を表現しようという傾向が顕著に現れ始めた。いずれにしてもこれらの背後にあったのは、もちろん、多言語と多元的価値観をよとするヨーロッパへの統合という流れであり、その中で、それまでの東ドイツという“小さな海”から、ドイツそしてヨーロッパという大海に漕ぎ出したソルブ人たちが、自分たちの文化アイデンティティを確保するために、さまざまな試みを始めたのである。

4. 21世紀のソルブ語とソルブ文学は、バイリンガリズムを武器として自分たちの存在価値を認めるに至ったといえるだろう。とはいえ、このバイリンガリズム自体がかなりあやういことは間違いない。先に述べたように、言語話者集団が総計でも2万人、彼らのソルブ語による活動—日常会話なり、学校教育なり—がこの先まだしばらくは続くとしても、読書という点ではドイツ語のほうが圧倒的に優位である。書き手の集合も読み手のそれも先細る中、バイリンガル文学が“ソルブ人のドイツ語文学”，あるいは単にドイツ文学になるのも、そう遠くないのかもしれない。

ここで私たちは、この短いエッセイの最初の問いに帰つてくださる—「言語の消滅はよくないことだろうか?」—じっさい一つの作品がソルブ語とドイツ語で書けるなら、ソルブ語はなくともよいではないか。つまり言語にはかけがえがあることになる。でもほんとうに、そうなのだろうか?

言語的にソルブ語がドイツ語との長い接触によって、そうとうにドイツ語化されていることは類型論者の誰もが指摘することではある。統語構造、とくに語順、スラヴ語の指示代名詞の定冠詞的用法、カルクによって作られた語彙や成句の数々。だからといって、ソルブ語で書かれた小説や詩をドイツ語に逐語訳してそのまま、ソルブ文学のドイツ語訳になるわけではないだろう。ソルブのバイリンガル作家の先駆者となったプレザンは、文を書いている途中でソルブ語からドイツ語に切り替えることは何の問題もない、としながら「ソルブ語での創作とドイツ語での創作は二つの別のプロセスであり、一方の言語での執筆体験はもう一方のそれをより精密なものにしてくれます。この二つの異なりは、それぞれに新しいニュアンスをもたらすのです」と語っている<sup>7</sup>。作家のこの言葉はやはり、言語はかけがえがあるものではない、と伝えているのではないだろうか?

ひとつの言語の消滅とは、その言語の話者がいなくなること、つまりは当該言語のコミュニティが消滅することにほかならない。そこには、言語シフトによる言語喪失という形のコミュニティ消滅もあるだろうし、文字どおりのコミュニティ消失もあるだろう。そしてその中には間違いなく、コミュニティの住環境の変化と呼べるものがあり、原因には戦争、占領、強制、集団移住、土地開発、あるいは環境異変など、何か“ふつうでないこと”がある。ドモヴィナ代表の「我らが存在をかけて」という言葉も、ソルブ人が歓迎したわけではないドイツ文化の支配や、褐炭開発による住空間の喪失という、“ふつうでないこと”を長く体験してきたソルブ人だからこそ、出てきた言葉だったとも思える。

ソルブ語の—というか世界の多くの少数言語の—消滅はそれ自体、しかたのないことかもしれない。けれどある言語の消滅の背後で、そのような“ふつうでないこと”が起きていて、それは回り回って私たちにも関係することになるかもしれない。筆者は少数言語の感傷的な擁護者ではないが、

少なくとも上記の意味で、言語の消滅という現実に私たちが無関心であるのはよくない、と考えている。そして一つの言語が構築する世界とそれがもつ価値体系が、言語と、そしてその文化環境と密接に結びついている以上、やはり言語はかけがえのないものだ、と思うのである。

## 注

1. Hans M. van den Brink, "Language and Terror: Seven Remarks on the Languages of Europe," in Ursula Keller and Ilma Rakuša (eds.), *Writing Europe: What Is European About the Literatures of Europe?: Essays from 33 European Countries* (Budapest, Hungary: Central European University Press, 2004), p.54; 邦訳はウルズラ・ケラー、イルマ・ラクーザ編『ヨーロッパは書く』(鳥影社, 2008年)。なお本文の訳は本稿筆者による。

2. 二つのソルブ語の音韻特徴を取り出すと、これらはちょうどチェコ語—上ソルブ語—下ソルブ語—ポーランド語といった形の連続体に位置付けられる。下の表は(1)“爪”, (2)“山”, (3)“髪”の共通スラヴ語形と現代語の語彙。それぞれ \**ktj*, \**g*, \**TOLT* の反映形を表している。

共通スラヴ	チェコ	上ソルブ	下ソルブ	ポーランド	ロシア
(1)*nokъ	noc	nóc	noc	noc	noč'
(2)*gora	hora	hora	gora	góra	gora
(3)*volsъ	vlas	włos [wos]	włos [wos]	włos	volos'

3. Madlena Norberg, "Maintaining Lower Sorbian: It's hard, but we're doing our best," 2015年2月2日東京大学文学部スラヴ語スラヴ文学研究室主催特別講義の中で。

4. ラウジッツの褐炭開発と、ブランデンブルクのソルブコミュニティ喪失については三谷恵子「下ソルブ語の現状—19世紀からWITAJ までのみちのり」『西スラヴ学論集』IV, 2001年, 68-85頁; 三谷恵子「下ラウジッツのソルブ語—WITAJ 発足から10年を経て」『西スラヴ学論集』XII, 2009年, 33-58頁。

5. Johann Gottlieb Hauptmann, *Nieder-Lausitzische Wendische Grammatica. Fotomechanischer Neudeuck mit einem Vorwort von Helmut Fafke* (Bautzen: Domowina, 1984), p.5.

6. Dietrich Scholze, *Stawizny serbskeho pismowstwa 1918-1945* (Bautzen: Domowina, 1998), pp.55-70.

7. Jurij Brëzan, "Die Enge ist sanktioniert. Fragen von Hans-Peter Hoelscher-Obermaier und Walter Koschmal," in Walter Koschmal (ed.) *Perspektiven sorbischer Literatur* (Köln, Weimar, Wien: Böhlau Verlag, 1993), p.65.